

## ★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

# やまじ たゆきお

(篠原幸雄・しのはら幸雄)

プロフィール ● 1950年東京で生まれる。東京デザイナー学院中退後タイナミックプロで4ヶ月アシスタントを経験し、1970年『少年ジャンプ』『悪魔の水』（篠原幸雄）でデビュー。その後『まんが王』『冒険王』『少年チャンピオン』等で作品を発表する。1978年『ガッチャマンII』（てれびくん・小学館刊）はしのはら幸雄名で描く。その後30年あまりペンを折るが、新つれづれ草発行がきっかけで再びマンガを描くようになる。

マンガをあまり読まなかった子供時代  
はじめ絵コンテのようなものを描いた



生まれたのは世田谷の日赤病院。両親と兄二人の五人家族でした。最初は池袋のアパートに住んでいたようですが、幼稚園に行く前に練馬の氷川台に引っ越して、ちゃんと記憶があるのはそこからですね。父親は大学教授で、母親は

専業主婦。外から見たらインテリの家庭に見え  
たかもしれません。

実際父親は昔で言う帝大、つまり東大を出て  
いたこともあって、子供を東大に入れたかった  
ようです。上の兄がいちばん出来が良くて、そ  
れでも東大には入れなくて、東工大に入りました。  
次男は中央大学。三男の僕は大学すら行か  
なかつたという親不孝者で(笑)。

実家のあった場所の近所にある、  
氷川神社の鳥居の前で…。

小学校と中学校はレベルの高い学校に越境入学していました。それは上の兄ふたりも同様。氷川台というところは当時、陸の孤島でバスぐらいしか交通手段がなくて、三十分ほど歩いて学校に通っていました。だから近所に友達がいなかったんです。

母親は教育熱心な人でした。だからと言って「勉強しなさい」と強要することはなかった。子供のために何かをしてあげたいという気持ちが強かったんじゃないかな。あるとき中学の英語のテストがすごく悪くて、母親が慌てて英語の家庭教師をつけてくれたことを覚えています。でも漢字とか地理の地名といった暗記物が苦手で、というか努力しないとできないものはやりたくなかった。数学とかは理解すればできるじゃないですか。だから自分では理数系だと勝手に思っていました。図工は得意でしたよ。

小学校のときはずっと成績は5で、まわりからも「上手だね」と言われるし、本人もその気になっていました。でも、絵だけは嫌いで、うまく描けたと思ったためしかなかったなあ。

中学に上がるまで、ほとんどマンガは読まなかったですね。近所に友達がいなかったし、家でも兄が持っていたマンガを読んだ記憶はないけど、それも頻繁にあつたわけではなかったですね。マンガを描ききつかけになったのは、中学のときのクラスメートが小説を書いできて、そのことを自慢げに話しているのを見て、自分も書こうと。でも小説なんか書けないので、マンガなら描けるかなと思ったのが最初です。ただ描けるほどマンガを読んでなかったし、描き方もわからない。だからシナリオのよいうなものを書きました。どこかの星の王子が地球にやってきて、お姉さんが敵に捕まってそれ

を助けに行くというSFストーリーです。それで、そのシナリオに絵を付けたんです。今思うと絵コンテみたいなものだったかな。

ちゃんとしたマンガを描くようになったのは、手塚治虫の「マンガのかきかた」を読んだからです。墨汁で描くとか、模造紙を使うとかを覚えて。それまで描いたシナリオをマンガに描き換えていったんです。マンガを描くときに意識したのは、ちばてつやかな。手塚でも石森でもなかった。ちばてつやのどの作品というこ

とはなかったけど、真似しやすかったですね。それが中学の頃で、マンガ好きな友達もできました。

そのときの友達三人で作ったのが「つれづれ草」です。その少しあとに広島にいた新宅よしみつさん（第3号にインタビュー掲載）と知り合ったんですよ。彼は「つれづれ」創刊メンバーの北沢三喜男さんと文通仲間だったことから参加するようになりました。その新宅さんが自分の文通仲間の声をかけてくれて、全国から



肉筆回覧マンガ同人誌「つれづれ草」第1号



肉筆回覧マンガ同人誌「つれづれ草」第10号

メンバーが集まってきたんです。おだ辰夫さん（第6号にインタビュー掲載）もそのひとりでした。新宅さんは高校を中退して上京し、漫画家のアシスタントになったこともあり、「つ

れづれ」は次第に彼を中心に作られるようになりました。そして、「COM」で紹介されたり、新宿にあったマンガ喫茶「コボタン」で展示会をやったりしていました。田口えつおさん（第4号にインタビュー掲載）が参加してきたのもそれくらいの時期でしたね。マンガの仲間が一気に増えたというか。僕は自分でもマンガを載せていたけれど、みんなの原稿を集めて綴じたりするまとめ役をしていて、それはそれで楽しかったのを覚えています。



### テーマありきでマンガにアプローチ 「ジャンプ」で味わった苦闘の日々

初めてマンガを投稿したのは、「鉄腕アトムクラブ」という虫プロのファンクラブの機関誌です。『ホワイトマン』という最初に描いたマンガがすでに百ページぐらいになっていたの

で、それと『M&W（マンアンドウーマン）』というSFの短編マンガを送りました。『M&W』のほうが選外佳作で掲載されました。すごく嬉しかったんですが、原稿は戻ってこなかった。

マンガの持ち込みを始めたのは、高校二年ぐらいからです。行ったのは集英社と秋田書店、それに少年画報社と「ガロ」の青林堂。集英社では「少年ブック」の編集者の角南（すみ）攻さんのお世話になりました。そう、のちに「少年ジャンプ」に異動して『トイレット博士』のスナミ先生のモデルになった人です。彼はまだ駆け出しだったので、「少年ブック」の読者コーナーを担当していたんです。そのコーナーの書き文字を発注してくれました。秋田書店では、単行本の部署でカットの仕事をしていました。釣りの入門書で、魚の絵を描きまし

た。僕は絵が下手だったんですよ。そんな僕でもできそうな仕事をまわしてもらいました。ギャラもいくらかいたただいて。優しいですよ。ね。

そのままプロになることは信じて疑わなかったです。なので、大学なんかに行くつもりはなかった。でも親が不安だったので、東京デザイナー学院のグラフィックデザイン科に入ったんです。マンガで食えなかったら、デザインで食いなさいという親心ですね。でも、当時は七〇年安保の真っ只中で、学校はバリケード封鎖されるわ、授業もないわで一学期でやめちゃいました。それに角南さんから永井豪先生のダイナミックプロでアシスタントを探しているから、お前やらないかと誘われたんですよ。もちろん二つ返事で行きました。高校を出た年ですから、19歳のときですね。

永井先生は『ハレンチ学園』や『あばしり一家』を連載していた頃で、僕がなぜ呼ばれたかというと、ダイナミックにいた小山田つとむさんが「少年サンデー」で連載することになり、そのアシスタントが必要だったからです。ベタ塗りをおもにやっていましたね。時間が空いたら永井先生のお手伝いもしました。徹夜で原稿を仕上げ、近所の居酒屋で朝食セットみたいなものを食べて解散。それでまた昼過ぎに集まって作業、という生活でした。ダイナミックから見ると、僕は集英社から回された若造、という感じだったと思います。永井先生とはそんなに会話はしなかったかな。朝飯をみんなで食べに行つたときに話したぐらいでした。

その頃、神保町の古本屋で新潟のイタイイタイ病の本を見つけて、角南さんにこれをマンガにしたいと言つたんです。その本はイタイイ

タイ病を告発したお医者さんの手記でした。企画が通ったので、その年の12月にダイナミックを辞めました。そしてイタイイタイ病のマンガに専念するわけです。それが『悪魔の水』。デビュー作です。僕はストーリーマンガ派でした。テーマありきでマンガを描いていましたから。そういう意味で公害問題はとっつきやすかった。「ジャンプ」としても、中沢啓治の『はだしのゲン』がヒットして、その路線を続けたかったんだと思います。

実際、描き始めたわけですけど、それはもう大変でした。計90ページで三回の連載だったんですが、その十倍ぐらいのネームを描きました。角南さんからは、ほとんど全部のコマに注文をつけられました。「人と人が喋るときに、この位置関係はないだろう」「このキャラクターは本当にこんな性格でいいのか」「ここでなぜ裁

ち切りを使わないんだ」といった、ストーリー作りからセリフ、マンガのテクニクにいたるまで本当に細かく指導されました。おかげでボロボロになりました。本当に力尽きたというか。描き上げたあと、しばらく集英社に行かなかったぐらいですから。もちろん角南さんは僕にマンガのイロハを一から教えようと思っていたわけで、その意味では感謝していますし、すぐくためになったんですが。

そのあと秋田書店で編集者の阿久津邦彦さん（第4号にインタビュー掲載）が僕の担当になつて「まんが王」や「冒険王」で何本か描かせてもらいました。彼は角南さんとはまったく逆で、何を描いても受け取ってくれました。そういう意味でストレスが発散できたので、また角南さんと一緒に描くことができるようになったんです。『うそつき』という交通事故をテーマに



「週刊少年ジャンプ」1970年  
第38号（集英社刊）に掲載され  
たデビュー作『悪魔の水』



「週刊少年ジャンプ」1972年第37号（集英  
社刊）『いのちの契約書』が掲載された



したオリジナルのマンガを30ページぐらい描い  
て、その次に『いのちの契約書』。これは水俣  
病をテーマにしたマンガです。60ページほど描  
きました。が、これまた大変な思いをして、最後  
に出稼ぎをテーマにした  
読み切りを描いて、もう  
二度と「ジャンプ」では



「まんが王」（秋田書店刊）に掲載された『よわむし』

描かないと勝手に喧嘩別れみたいになっ  
てしまいました。  
今思うと、公害をテーマにして描きまし  
たけど、僕自身、現場に行つて取材をし  
たわけではなかった。本などの資料を  
もとに、僕が想像して描いたもので  
す。現場に行つたらきつと描けな  
かったと思います。中沢啓治のよう  
に、当事者でもないし、悲惨な事  
実を受け止められない。  
それでも取材に行つて描こうと  
したこともありました。当時、成田  
闘争があつて三里塚のマンガを  
描こうと思つたんです。それを角  
南さん



## 自分が描きたいマンガは何か 悩みながら発表の場を作り出していく

に言ったら、「勝手にやったら」と。その言葉の意味を考えると、たぶん角南さんは僕が現場を取材して描くタイプの作家ではないと見抜いていたんでしょうね。実際、三里塚に行きましたけど、ちゃんと取材もできなかったし、結局描けなかった。

「ジャンプ」と決別したあと、おもに秋田書店で描くことになりました。「冒険王」で描いた読み切りを、当時の壁村耐三編集長がすごく褒めていたというのを阿久津さんから聞きました。それもあつて「少年チャンピオン」で描かせてもらい、連載をすることになりました。それが『負けずの大五』という医者をも主人公にしたマンガです。その連載が始まったとほぼ同時

に、手塚さんの『ブラックジャック』も始まったんです。同じ雑誌に医療マンガが二本載っているというのは今思うとすごいなあと。しかも相手はあの手塚さんで。

話を『負けずの大五』に戻しましょう。とにかく連載ですからね。毎週毎週描くわけで、それはもう過酷なスケジュールなわけです。医療をテーマに描きたいという気持はあつたけど、とてもストーリーをまとめる自信はなく、原作付きにしました。その原作をやってくれたのは、杉山義法さんというシナリオライターでした。杉山さんは僕の古くからの恩人で、中学のときに英語を教わった家庭教師の旦那さんで、当時はまだ駆け出しだったんですが、僕が描いたマンガを読んでくれたりして、その後長いおつきあいをさせてもらっていたんです。僕が原作をお願いしたときは、杉山さんは大河ドラマ



『負けずの大五』（ふしぎな仲間たち社刊）1977年2月発行

の脚本を書くような大御所になっていて、それでも原作をこころよく引き受けてくれました。ほとんどギャラもなかったんじゃないかな。本当に感謝してもきれないです。

連載は10回続きました。そのあと壁村編集長に呼ばれて、「お前はもう使わないよ」と。そのときの言葉の真意はわかりません。文字通り「使わない」ということなのか、それとも「使

える原稿を持つてこいよ」ということなのか。半年ぐらい冷却期間を置いて、また挨拶に行けば描かせてもらえたかもしれない。今さら「ジャンプ」にも戻れないし、どうしようとかと考えたとき、自分でマンガ雑誌を作ることと思いついたんです。

それが「ふしぎな仲間たち」という自費出版のマンガ雑誌です。当時、「ぴあ」とか「シティロード」といった書店に直販するような雑誌があったので、自分でもできるだろうと思い、仲間と一緒に作り始めたんです。そのときの仲間は「つれづれ草」のときとは違う意志を持って集まった人たちです。僕のように、描きたいものはあるけど、今の商業誌ではなかなか発表の場を持ってない人たちが多かったですね。

「つれづれ草」の仲間はその後それぞれマンガ家を目指していく、精神的なライバルになって

いきました。「ふしぎな仲間たち」では「商業

誌」を作るんだとがんばっていました。今考

「自分のマンガの発表の場は自分でつくる」と、志は大きかった。「ふしぎな仲間たち」(第1号) 1974年10月発行



1号の発行から8ヶ月、大きな反響があり、ここに自由なマンガ空間がある「ふしぎな仲間たち」(第2号)を1975年6月発行することができた。



と思います。ただ、そのあとが続かなかつた。医療系のマンガを描きたかつたので、今度は看護婦さんを主人公にしたものを描こうと思ったんです。でもまとまらなかつた。自分の中に引き出しがなかつたというか。



マンガの筆を折って二十年  
いま再び描き始めて思うこと

「ふしぎな仲間たち」には、『負

「ふしぎな仲間たち」は二年ほど続きました。

けずの大五』の続編を描きました。アシスタントも使わず、全部自分で描いたので、かなり思い入れのあるものに仕上がった

それなりに読者もいて、支持してくれる人も多かつたんですが、資金がショートして、印刷所に借金を作ってしまいました。やむなく休刊にして、僕はその印刷所から版下の仕事をもらいながら、借金を返すことになりました。そうこうしているうちに、いろんなところからデザイン系の仕事がまわってくるようになったんです。不思議なもので、その後収入がだんだん

安定してきて、借金は一年ほどで返済できました。

その後もマンガの仕事はしました。単行本でウルトラマンのカットを描いたことから、それを見た小学館の「てれびくん」を紹介してもらい、『科学忍者隊ガッチャマン』のコミカライズを描くことになりました。あと、集英社で『鳥のなかま』という学習マンガを描きました。「ジャンプ」のルートとはまったく違うところからの発注でした。それがマンガの仕事としては最後ですね。その頃は、マンガはもう

「鳥のなかま」(集英社刊)  
1980年11月発行



「仕事」という感じでした。テーマありきで描いていた頃とはまったく違うスタンスでしたね。

結婚したのもその頃です。奥さんとは高校三年

のときに彼女が一年生で出会ってからの付き合いです。物心ともに自分を支えてくれた奥さんにはなんと感謝していいかわかりません。

そのあとはデザインの仕事から編集までやるようになり、編集プロダクションを作つて、ブームになったファミコンの本を作つたりしていました。徳間書店で「わんぱくコミック」というマンガ雑誌を編集者として作りましたが、マンガを描くことはありませんでした。道具も全部捨てちゃつたし、二十年ぐらい描きませんでした。それでも「つれづれ」の仲間たちとは、いろんな形で交流は続いていきましたね。それがあつたからこそ、「新つれづれ草」という形で復活したわけで。

それでもまさか自分が再びマンガを描くとは思いませんでした。コミックスタジオというソフトを使えば、パソコンで描けることがわかつ

たので、重い腰を上げたというか。マンガを描くことに夢中になっていたあの頃から三十年経って、人生の終わりが見えてきたときに、もう一回描いてもいいかなと思ったところもありますね。それに賛同してくれた人が集まってくるのが、今の「新つれづれ草」です。

それでも、いざ描くと苦しいですね。辛かったときのことを思い出しちゃう。やっぱりマンガを描くのは大変です。ただ、ドラマを作るのは楽しいし、今は自分の過去をネタに描いているけど、いろんなエピソードをどのようにマンガにしていくなかを考えている毎日です。でも数ページが限界です。長いものを描く精神力は残っていないなあ（笑）。

## ●インタビューを終えて

まさに人に歴史あり、というインタビューでした。取材は二日間にわたり、総インタビュー時間は三時間を超えました。いくらなんでも紙数が足りないのです、泣く泣くカットしたエピソードも多数あります。ご両親のこと。長きにわたって精神的な支柱となった人たちとの交流。マンガの筆を折ってから立ち上げた会社での出来事など：まさに波瀾万丈、というかものがすごく面白い人生だと思っています。まだまだこれからもつと面白い人生が待っているはずですので、ぜひこのまま突っ走っていただきたいと思っています。

文／中島泰司

2011年8月28日&9月1日

江東区大島・珈琲館&実楽来にて

つれづれ  
インタビュー  
マンガびと  
10

やましたゆきお

